

連載小説
それから物語
第5話

(原案 リフレインさん&アニメの世界さん&アニメの世界2さん)

リンの言う「見せたいもの」とはいったい何なのか？
身体は元の大き
さにもどせるのか？ みんなから投稿のあったお話の続きをさっそく
読んでみよう！

リンが見せたいものがあると書いて10分ぐらいいが経った。

「ねえリン、どこに行くの？」

「私の国ナリ！最初はミグに出会った後、すぐに行こうと思ってたんだけど、その前に雲の国に行っちゃったから今、大急ぎで向かっているナリ！」

リンがそう話していると雲の切れ間から美しい月が見えた。

「見えてきたナリ！あそこが私の国、『ルナフェルシテイ』ナリ！虹の橋を渡れば、もう着くナリ！」

すると、月へ向かって虹の橋が見えてきた。橋を渡り終えると、そこには美しく賑やかな町が広がっていた。

「すごーくいいー！」

「ホントは町案内したいところなんだけど、その前に学校に行かなくちゃいけないナリ！」

そう言ってるリンは、さっきよりもうんと強い力で私の手を引っ張って行った。学校も町と同じくらい美しかった。美しい学校の校舎の中を一気に突き抜け、リンが止まっていたのは、校長室の前だった。重く分厚い扉を開けると、目に大きなステンドグラスの絵が飛び込んで来る。その絵は今にも動き出しそうだった。

「遅いですよーリン、もう第一の試練ははじまっていますよ」

「それでもいいナリ！」

「だめです！」

「っ……」

そんな二人のやり取りを見ると、なんとなくバツが悪くなつてポケットに手を突っ込んでやり過ぎすことにした。

「コッソリ……」

指先に何かが当たった。握ってみる。…固い。……角ばって、こつこつしていると…

がひんやりとしていて、とつても心地いい。ポケットから、そつと取り出す。するとそれは、電球の形をしたトパーズのような石が光っていた。その石を見つめていると、どこからか強烈な視線を感じる。校長先生だ。校長先生が、私の持っている石を見て目を丸くしている。

「それは、ひらめきの石！ いったいどうやって……。いいでしょう。参加を認めます。今夜はここで泊まりなさい」

何の事だか全くもって分からないけれど、ともかく認めてもらえたようだ。リンが跳びはねて喜ぶ姿を見ると、私も顔がほころんだ。



次の日の朝、私は学校の広場にけたたましく流れるアナウンスで目を覚ました。

『第二の試練は、勇気の石です』

「勇気の石？」

第二の試練、勇気の石——アナウンスで流れたワードは、到底見当もつかないけれど、私は本当の意味での冒険の第一歩を踏み出したのは間違いないようだ。

コネロク男爵との勝負に勝った後、私の背中は汗でびしょりと濡れていた。背中にびったりと服がくっついたまま、バタバタしてて昨日の夜もシャワーも浴びることなく、泥のように眠りについちゃったから、爽やかな目覚めとは真逆の位置にある。

ホント気持ち悪い。

（あーっ、シャワー浴びたいっ！ 上から下まで、まるごと全部着替えたっ！）

そんな私のどんより状態に全く気付く様子もなく、リンは寝ぼけまなこの私の手をぐいぐい引っ張る。

「さあ、行くナリよーミグ！ 勇気の石を探しに！」

窓の外に目をやると、広場から、たくさんの生徒が白い雲の渦に向かって、どんどんどんどん飛び立って行く。

「出遅れた分を、一気に取り戻すナリよ！しっかりつかまつるナリ！」

リンは、私の手をぐいぐいと掴むと、ステンドグラスの窓をバンと力いっぱい広げて、ものすごい勢いで白い雲の渦に向かって飛び立つ。この夏休み最後の日曜日に観たアニメの映画にも、これとよく似たシーンがあった。男の子が、大好きな女の子の手を取って一目散に駆け上がるシーン——風を頬に受けながら静かに目を閉じて、そのシーンを思い返していたら、リンが不思議そうな顔でこっちを見ていた。私は、何だかとても恥ずかしいところを見られた気がして、慌ててリンに質問をぶつけた。

「ねえ、ナヲシル界に『アニメの世界』なんて世界とかって、あるの？」

「まかすつもりで口にした質問に、リンは得意気に鼻の下を指で擦りながら、きっぱりと答えた。

「あるナリよ！」

リンのまさかの返しに、言葉を失った……。アニメの世界ってコトは、アノ青いからだ、赤い鼻の夢のような道具をポケットから次々と出すネコ型ロボット【ドラ●もん】もいるってコト？それなら、【ドラ●もん】に頼んでひみつ道具【ビックラ●ト】を出してもらえば、元の大きさに戻れるし、一緒に【どこでも●ア】も出してもらえば、もとの世界にだつて戻れるじゃん！

「リン！連れてってーわたしをその『アニメの世界』へ!!」

「アニメの世界ってことは、【メテアタウン】に向かうってことナリか？全然、方向が逆ナリよ！」

「お願い！リン！この頼みを聞いてくれたら、どんな冒険も付き合うわ！だからお願い、リン！一生のお願い！わたしをその『アニメの世界』に連れてって！」

「人間は、その一生のお願いって言葉をすぐに使うナリな……。分かったナリ！ちよつとだけナリよ！」

リンは大きくため息をつくくと、ぐるんと急旋回して、さっきよりもさらにスピードを上げて急上昇急降下を繰り返して、私の髪は落ち武者のようにボサボサになつていった。でも、髪型なんて、もうどうでもよかった。そんな事より私の頭の中

「アニメの世界」で、これから出会うかもしれないキャラクター達で膨れ上がっていた。「銀魂」の土方様、「ワンピース」のゾロ、「NARUTO」のカカシ、「ジブリ」のトトロにホニョ、「ドラゴンボール」のベジータ、「ガンダム」と「エヴァンゲリオン」のバトルなんて夢の対決もあったりする？「君の名は」の瀧さんと身体が入れ替わっちゃうなんてことも体験できたりする？？？ そんな夢のような世界が、目の前で展開されるかと思うと、ワタシのニヤけた顔は緩みっぱなしだ。

「着いたナリよ！」

リンは素っ気なくそう告げると、私の手をそと放した。連れて来られたのは、草原。広い広い草原。でも、どこかで見たことのある草原。草の色あい、木々の間を抜ける一本道、飛び出た岩、目に映るもの全てにどこか懐かしさを感じてしまふ。そう、私は間違いなくこの景色を知っていた。

その時だった。目の前の草が大きく揺れた。

「ピッ。ピッ。ピカアッ！」

アノ声と共に目の前を黄色い影が横切った。

「ピカチュウだ！」

そう、目の前に広がっていたのは小学生の時に夢中で見ていた「ポケモン」の世界だったのだ。

「ミグ！何をボオ〜としてるナリか！早く投げてGETするナリよ！」

（投げるって、何を……。）と思う間もなく、手を見ると右手にはモンスターボールが握られていた。アノ赤と白の2トーンのお馴染みの球体。本物は意外と重かった。（いつの間に……？）という疑問を感じる前に、私の右手は反射的にモンスターボールを大きく弧を描いて投げていた。

「すごいナリ！一発目でいきなりGET成功なんて、見たこと無いナリ！今GETしたピカチュウ、この後、絶対役に立つから、しっかり持つてるナリよ！」

リンは、手を叩きながらそう言っていると、道の真ん中に転がるモンスターボールをこちに放り投げた。

【続く】

第二の試練に挑戦する二人。「アニメの世界」に入ったが、ほんとうにそこで元の世界に戻れるのか？このお話の続きは、またまたみんなから募集するよ。（高橋）

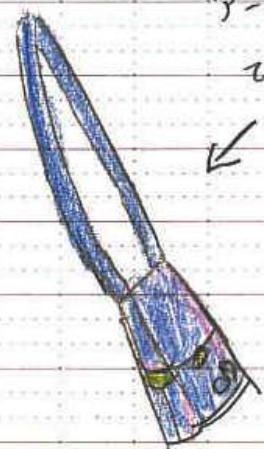
どうこうしゃ 投稿者・作

「それから物語」が100倍楽しめる図鑑！



リン

オシル界にいる間
人間界の時間はたっていない
またオシル界にいる間
ミグは年をとらない。
(人間界の人)



アニメの世界
で使う



阪野さくらさん、さつそくの投稿ありがとうございます！ マイナスの点数、ショックだね。4コマまんが第二回は次回掲載します。お楽しみにね！